

SP-1

日本における前向き子育ての現状 —地域での展開とその効果—

柳川 敏彦¹、加藤 則子²¹和歌山県立医科大学保健看護学部保健看護学科、²十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科

Positive Parenting Program の頭文字である 3 つの P から名付けられたトリプル P は、国際的に最も効果があるプログラムの 1 つに認められ、現在 25 カ国の政府や保健部門の専門家に採用されている。日本では 2005 年に導入され、現在 40 都道府県で実施されている。平成 27 年から実施されている「健やか親子 21」第 2 次計画は、「すべての子どもが健やかに育つ社会」を掲げ、すべての国民が地域や家庭環境等の違いにかかわらず、同じ水準の母子保健サービスが受けられることを目指し、「すべての子ども」「すべての親」というキーワードは、トリプル P の理念に呼応する。増加しつつある児童虐待防止の観点において、「子どもを叩くことを容認したり、厳しいしつけの使用を黙認する社会では、児童虐待のリスクが顕著に高い」ことが国内外からの研究で明らかにされつつあり、日本における体罰容認社会の変容が強く求められている。シンポジウムでは、オーストラリア・クウィーンズランド大学臨床心理学教授のマッシュ・サンダース博士とそのチームにより開発されたトリプル P の概要とわが国での実践を紹介し、わが国のさらなる普及を目的とする。親の子育てにおける問題の深さとニーズは様々であることから、トリプル P は介入のレベルを 5 段階に分けている。レベル 1 ではメディアを介した啓発が行われ、レベル 2 では特定のテーマに関するレクチャー、セミナーが行われ、レベル 3 は子どもによく見られる問題（かんしゃく、夜尿など）の解決のための個別セッション、レベル 4 はより広範な問題に対してのグループ学習、レベル 5 では困難事例への個別対応などである。ポピュレーションアプローチの方法としてレベル 2 を取り上げ、乳幼児、学童のいる親へのセミナーや、本年 1 月に日本に導入されたティントリプル P セミナーについて言及する。トリプル P 実践は、親のストレスを減らし、子どもとの良い関係が得られ、子どものコミュニケーション能力や自尊感情の高まり、そして子どもの問題行動の予防など、多岐にわたる効果が得られている。トリプル P は、さらに子育て支援の専門家のスキルアップにもつながっている。シンポジウム 1 部では 3 名から地域の実践を紹介し、2 部ではご参加の皆様にもプログラムを体験していただき、子育て支援プログラムのポピュレーションアプローチへの活用について討論していきたい。